

Title	G. ウッドコック著 白井厚訳 アナーキズム
Sub Title	George Woodcock, Anarchism : a history of libertarian ideas and movements, 1962
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1969
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.62, No.1 (1969. 1) ,p.106- 108
JaLC DOI	10.14991/001.19690101-0106
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19690101-0106">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19690101-0106</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

G. ウッドコック 著 白井 厚 訳

『アナキズム』

George Woodcock, Anarchism—A History of Libertarian Ideas and Movements—1962

I

アナキズムの再評価およびその運動への認識と理解が、とみに深まりつつあるといわれる。とくに最近の学生運動の思想的底流として、アナキズムが重要な意義を担っていることは否定しえない事実であって、その背景が何であるかを、われわれは真剣に考えてみる必要がある。

一般にアナキズムの思想と運動が、ひとつの大きな無視しえない勢力として認められるに至ったのは、1860年代から70年代にかけての第1インターナショナルの末期、とりわけミハイル・バクーニン (Michael Bakunin)を中心とする運動を通じてであったといわれる。もちろん、それ以前にもたとえば、ウィリアム・ゴドウィン (William Godwin) やブルドン (Pierre-Joseph Proudhon) のような理論的な創始者の先駆的な活動の歴史はみられたけれども、ヨーロッパの労働者階級にたいし、理論的にもまた組織的にも、きわめて大きな影響を与えるようになったのはバクーニンの出現以後のことであった。1864年に成立した国際労働者協会、いわゆる第1インターナショナルの70年代における衰亡が、まさしく、パリ・コンミュンによって象徴されるところのマルクス主義とアナキズムとの対立抗争を軸とするイデオロギー的原則および組織運動上の対立を契機とするものであったことを想えば、このことは明らかであろう。

1889年、パリにおける第2インターナショナルの成立以後、アナキズムの影響は、衰えたとはいっても、ラテン語系諸国民、すなわちフランス、スペインおよびイタリアなどの労働者階級に根強い浸透をみせ、今世紀初頃、いわゆるアナルコ・サンディカルズム (Anarcho-sindicalism) としてヨーロッパの労働運動に革命的精神を鼓吹し、アメリカにおける I. W. W. の運動、アイルランドにおける不熟練労働者の闘争も、

その影響のもとにあったことは周知のところである。「大逆事件」に連座した幸徳秋水も、こうした世界的な anarchism の潮流に棹さしていたといえることができるであろう。

その後、1917年、ロシア革命の成功によって、anarchism は次第に歴史の思想的舞台からひきおろされたのであるが、最近また再びその歴史的な意義が問題となってきたことは一体何を物語るものであろうか。もっとも重要な要因として、マルクス主義の教条化、ソヴェート共産党のマルクス・レーニン主義の正統性を理由とする体制内化=保守化傾向の定着化、革命的精神の喪失、共産主義国間における大国主義的害毒の蔓延、全体として、世界の共産主義運動内部におこりつつある多元的傾向にたいして、ひとつの批判的な勢力として盛り上ってきたのではなからうか。

いずれにしても、われわれは、いまやアナキズムをもって、歴史的な遺物としてではなしに、まさに現代における「生ける思想」として再び真剣に検討せざるをえない時期にきていると感ずるのは、筆者のみではあるまい。ウッドコックの研究は、この意味ではまことに教訓的であるし、今回、白井 厚氏によって邦訳されたことは、まことに時宜に適したものとといわなければならない。

II

邦訳書は、二巻にわかれており、第一部 思想篇、第二部 運動編となっているが、全体を通して、目次を紹介しよう。

I プロローグ <第一部 思想>、II 系図、III 理性の人 (ウィリアム・ゴドウィン)、IV エゴイスト (マックス・シュティルナー)、V 逆説の人 (ビェールジョセフ・ブルドン)、VI 破壊の衝動 (ミハイル・バクーニン)、VII 探検家 (ピョートル・クロボトキン)、VIII 予言者 (レフ・トルストイ) <第二部 運動>、IX インターナショナルの努力、X フランスにおけるアナキズム、XI イタリアにおけるアナキズム、XII スペインにおけるアナキズム、XIII ロシアにおけるアナキズム、XIV ささまざまな伝統——ラテン・アメリカ、北ヨーロッパ、イギリス、合衆国におけるアナキズム、XV エピローグ。

このような豊富な内容について簡単に要約することは大体無理であり、そこで本書における問題は何か、すなわちアナキズムの問題は、今日のわれわれにとってどのような意義をもつものであるか、以上のよう

な問題を中心として考察したいと思う。

まず本書の邦訳 I であつかわれているところの問題としては、アナキズムの起源および19世紀に活躍した画期的なアナキズムの理論家および運動家の系譜についてくわしくとりあげられている。著者は、本書の冒頭において掲げた、「権威を否定しそれと闘うものは、だれでもアナキストである」というセバスチャン・フォールの言葉によって、アナキズムの伝統の起源を、農民共同体の崩壊期=資本の本源的蓄積期の初期段階における解放思想のなかに見出しており (45~59頁)、たとえば、イギリスに例をとれば、ジョン・ポールの思想、トーマス・モアの「ユートピア」思想、イギリス革命の渦中におけるレヴェラーズおよびディッカーズの思想および運動をアナキズムの系図においてとらえているが、しかしこれらの一連の思想家たちは、たんにアナキズムの思想的源流というよりはむしろ、社会主義思想全体との関連において問題とすべきであり、たとえば著者は、農民共同体的社会主義思想としてのウィンスタンの「聖ジョージの丘」での農民共同社会の建設への運動をもって「直接行動」 ("direct action") の端緒をなすものとしているが、ここにひとつの問題がある。同じことはトーマス・ペインについても、あるいはジェファンスの場合でも、彼らのアナキスト的性格を強調するとしても、ペインの本質たる急進主義=ブルジョア民主主義とそのアナキズム思想との関連はどうなるのか、この点についての分析的な叙述がきわめて不充分であるといわなければならない。想うに先駆的な存在としてはともかく、18世紀の産業革命以前の段階において、本来的なアナキストはみられず、体制としての資本主義の確立の過程ではじめて近代的な、すなわち本来のアナキストが生まれなければならなかったものであって、その必然性は、いうまでもなく資本制国家権力の機構的・制度的な確立、このことのなかにこそあるものであり、そのためには、生産力の発展にともなう地主、資本家および賃労働者という基本的に対立する三大社会階級への分解への徹底的な進行、それらの社会的・経済的諸矛盾に対応するものとしての国家機構の確立という事実が見逃されてはならないのであり、ウィリアム・ゴドウィンを「理性の人」とする著者の見解は興味深い。このゴドウィンの画期的意義というものが、著者にとって十分に正しくとらえられていないような気がする。一言でいえば、資本主義発達の理解の欠如である。

理性の人 (ゴドウィン)、エゴイスト (マックス・シュティルナー)、逆説の人 (ブルドン)、破壊の衝動 (バクーニン)、探検家 (クロボトキン)、予言者 (トルストイ) というように、まことに巧妙に19世紀の偉大なアナキストの人間的特性と思想とを象徴せしめており、本書全体を通じてもっとも面白い部分であると思うが、ここでも注目すべきことは、19世紀初頭から末期までのこれらのアナキスト群像は前半においては、イギリス、ドイツ、後半ではフランスおよびロシアの出身となっているが、これと関連して、アナキズム運動が真に大衆的な運動として無視しえない力をもちえたのは、19世紀にかんしていえばフランス (パリ・コンミュン) とロシア (ナロードニキ) であることである。今世紀に入るとは、フランスおよびイタリアがある。こうした各国のアナキズム運動の特徴を追求しているのが第二部の「運動篇」である。

フランス、イタリア、スペイン、ロシアをはじめとして、ラテン・アメリカ、北ヨーロッパ、イギリスおよびアメリカ合衆国におけるアナキズムの発展を、各国の労働者階級運動の発展のなかでとりあげているのであるが、これを読んで特徴的にみられることは、まず第一にアナキズム運動におけるブルドンとバクーニンの影響がいかに根強いものであったか、とくにバクーニンの圧倒的な影響である。著者は、アナキズムの歴史を五つの時期にわけている。すなわち、〈第一期〉第一インターナショナルの創設をもたらした議論にブルドン系の相互主義者が参加した時から、1872年のハーグ会議におけるマルクス主義者との決裂に至るまで、アナキストたちは——ブルドンに従うにしろ、バクーニンに従うにしろ——他の種類の社会主義者たちと協力して、自分たちの国際主義の念願を果そうとした。〈第二期〉1872年から1881年のかの有名な「黒色インターナショナル」会議に至るまでは、彼らは純粋なアナキストのインターナショナルを作ろうとした。〈第三期〉1889年から1896年に至るまで、アナキストたちは、社会主義第二インターナショナルにおいて地盤を固めることに勢力を集中した。〈第四期〉1896年のロンドンにおける社会主義者の大会から彼らが最終的に放逐されたことにより、さらに次の時期に入って、これは1907年のアムステルダム会議で頂点に達し、この時期に確信あるアナキストたちだけの組織をつくるのが再び試みられたが、第一次世界大戦の勃発とともに終わった。〈第五期〉1919年から1939年までのアナルコ・サンディカルズムの

成功の時期(II, 2~3頁)。

19世紀末期から今世紀初頭にかけてのアナーキズム運動の三つの主要な潮流は、著者によれば、厳密なアナーキズムとして、クロボトキンの影響を強くうけたところの、宣伝のみにその活動を限定するグループ——主としてクロボトキンの自由主義の教義を支持する——これとは対照的なアナルコ・サンディカリズム、そしてこの両者とならんで、〈自由意思〉を強調する教義としての相互扶助主義と集産主義とがあるといわれる。そしてこれらの諸潮流が、これらの各国において、それぞれどのような絡み合いをもって発展したか、その特徴をあげながら実に克明に追求している。たとえば、フランスにおいてはアナルコ・サンディカリズムを中心に、イタリアにおいてはバクーニンの影響をうけた労働運動のサンディカリズムへの傾斜、そしてファシズムとの関連について、スペインにおいては、はげしい弾圧に抗してのテロリズム、労働組合とゼネ・ストおよび共産党との関連においてふれている。ロシアにおけるアナーキズムについては、スラヴの伝統としての農村共同体思想——A. ゲルツェンに代

表される——とバクーニン、そしてナロードニキについて、その他の国についてもよく特質が把握されているが、各国別の歴史的叙述が目立ち、さきの五段階を軸とする各国相互のアナーキズム運動の比較や分析が全く欠除している。これはすでに指摘したように、著者の経済学的認識の浅さが、重大な欠陥となっており、われているのは否定しえない事実であろう。「エピローグ」はその点でやや有益であるが、この点についていまひとつの章がほしいと思う。

しかしそれにしても、本書を読むことによってわれわれは、いままでアナーキズムについて抱いていた見解を相当程度補正出来ると思うし、啓蒙的な意義はかなり大きいと思う。白井助教授をはじめとする方々の労を高く評価するものであるが、何と云っても、ボルシェヴィズムの本格的研究のためにも本書を土台として、すなわち、アナーキズムの正しい評価の上に立つ、より広はんな視野からする国際的な社会主義運動史の研究が必要となろう。(1968年6~7月、紀伊国屋書店、B 6. 339+372頁、1,500円)——1968. 11. 13. 深更——

飯 田 鼎

## The Verification of Economic Theories (reconsidered), Especially with Reference to K. R. Popper

by Shigeo Tomita

This essay aims at exercising the problem of verification, that is, ascertaining the truth of economic theories by experiences. Especially, here is considered K. R. Popper who seems to represent a significant view in the philosophy of science which is of recent development. Particularly, his view that is presented borrowing some positive examples from natural sciences, is examined as to how it could be bridged over to the traditional approach of economic science.

In this attempt, the two existing stands on economics that are in a marked contrast of each other, that is, the English Orthodox School and Marginalism are considered by comparing them to the "three views of knowledge" by Popper. Further, this paper will examine his idea of falsifiability, and come to the conclusion that in spite of Popper's significant criticism of the naive verification by the Orthodox School, the stand of marginalism could not be thoroughly condemned.

## An Analysis of Household Supply of Labor in Terms of Principal Earner's Critical Income

by Keiichiro Obi

- (1) The aim of this paper is to clarify the relationship between the participation rates (number of persons gainfully employed/number of persons) and the labor supply schedule in terms of income-hours of leisure preference functions, and to estimate the parameters of the preference function making use of the above mentioned relation.
- (2) Let us take a household whose adult members are consist of a gainfully employed principal earner (husband) and a potential earner (wife). In reality, workers have to